『南島』

――植民地台湾における未完の沖縄学――

Nanto

―An Aborted Attempt for Okinawan Studies in Colonial Taiwan―

泉水 英計

SENSUI Hidekazu

要　　旨

1940 年に台北で創刊された雑誌『南島』は、宮古や八重山の旧記類の翻刻と、これら先島の民俗調査報告によって沖縄の民族誌的研究のなかで特有の位置を占め、専門家の間で高く評価されている。しかし、日米開戦のために僅かに 3 号で実質的に廃刊となり、しかも植民地で発行されていたということも重なって、発刊の経緯や編集・執筆者の動向については不明な点が多い。本論では、編集の中軸となった二人の人物の研究歴を跡づけたうえで、未刊分も含めた主要記事を解説し、何故この時期の台湾で本格的な沖縄研究が芽生えたのか、また、その特徴は何であったのか検討してみたい。

台北高校の数学教師であった須藤利一（りいち）は近世数学史の調査に沖縄を訪れるが、専門外の離島民俗や異国船来琉記にも旺盛な好奇心を抱き、社交的で誠実な人柄と相まって彼を中心とした沖縄研究者のネットワークが形成される。いま一人の比嘉盛章（せいしょう）は、独学で学校教員になり、一時は沖縄政界を騒がせた人物である。同時に沖縄文化研究にも取り組んでオモロの斬新な解釈を編み出すが、強い自尊心が災いして学界中央に認められず、須藤との縁で台北に移住した。沖縄の民俗や言語、文学、歴史、そして音楽についての比嘉の学識と、須藤による研究組織の適切な運営が結実したのが『南島』であった。従来の沖縄研究で看過されがちであった八重山や宮古そして久米島といった離島の歴史と民俗の理解を大きく前進させる画期的な研究活動になるはずであった。『南島』に特徴的なこの関心は、その研究サークルが、先島との社会=経済的な関係が深い台湾をベースにしていたことが誘因となって、日本本土と異なる視点から沖縄文化をみていたことによって生み出されたものである。

【キーワード】　南島、沖縄学、台湾、須藤利一、比嘉盛章

目　　次

Ⅰ　はじめに

Ⅱ　須藤利一――「中央の学者（たふけんのものずき）」

　1　数学史研究

2　民俗調査
3　異国船来琉記
Ⅲ　比嘉盛章――沖縄のエンサイクロペディア
1　立志伝中の人
2　新天地台湾
Ⅳ　『南島』掲載記事解説
1　編集企画と出版の遅れ
2　各集の主な内容
3　南島叢書
Ⅴ　台湾から先島へ
Ⅵ　おわりに

Ⅰ　はじめに

沖縄の歴史と民俗の研究誌『南島』は、1940年に日本統治下の台湾で創刊され、戦争のために僅かに3号で終刊となった雑誌であるが、今日まで専門家の評価は高く、とりわけ宮古や八重山といった先島地方の研究者には必読書である。一方で、戦中に植民地で刊行されていたために、戦後は稀観書となり、復刻により利用が容易になった現在でも、発刊の経緯や雑誌をめぐる関係者の動きは断片的にしか知られていない。

何故この時期の台湾で本格的な沖縄研究が芽生えたのか。また、それはどのような特徴をもっていたのか。創刊号の編集を担当したのは、須藤利一と比嘉盛章、川平朝申（ちょうしん）、そして宮良賢貞の4名である。発刊に先立つ彼らの交流と関心の所在を明らかにしなければならない。本論では、『南島』の中核を担った須藤と比嘉に着目し、それぞれの沖縄研究を概観しつつ、両者を中心に展開した研究者のネットワークを描く。つぎに、『南島』の掲載論文を整理して紹介し、そのうえで、台湾でおこなわれた沖縄研究の特徴をみてみたい。

Ⅱ　須藤利一――「中央の学者（たふけんのものずき）」

1　数学史研究

須藤利一（1901–1975）の沖縄研究については新城安善による丁寧な書誌整理［新城 1977］があるが、同時代の他の学者との関連も視野に入れ改めてみておきたい。須藤は東京生まれ、1926年に東京帝大工学部を卒業し、翌27年秋から台北高等学校の数学教員となった。沖縄への関心が数学史［須藤 1934］に発していたことはよく知られているが、文科生向けの授業に使う材料集めという目的もあった［須藤 1966：18］。

発端となったのは、矢袋（やむろ）喜一の『琉球古来の数学と結縄及記標文字』［矢袋 1934］を手にしたことである。1910年代に沖縄県師範学校で教鞭を執った矢袋は、首里城の漏刻や先島の記標文字、そして、藁算と呼ばれる計算記録に使われた結縄の存在を知り、琉球数学についての先駆的な報告をおこなっていた。須藤は、矢袋の紹介した「精緻な藁算に驚嘆し非常な興味を覚えると同時に、古来琉球の一般数学に関する事項を調査したい欲望に炎え」、「此の書を唯一の参考書として、それ以外殆んど無方針無準備のままとに角昨夏沖縄の地を踏」んだのだという［須藤 1935–c：1；須藤 1935–d：30］。

「昨夏」とは34年夏のことだ。この調査旅行で沖縄県立図書館を訪れた須藤は、同館の漢籍算術書を写本した島袋源一郎と知り合い、北部まで探索の手を伸ばすが、日用算術書の稿本は見つかったものの、数学書と呼べるような高度な内容のものは稀であった。商人階級の台頭をみなかった琉球国では数学教育が軽視されていたからだという。宮古と八重山では算術書すらも少なかったが、かわりに藁算の標本を多く集めることができた。藁縄などを複雑に組み合わせ、形を変えた結び目によって位取りをして数量や暦日を記録したものである。近世期に主に課税割当の記録のために普及したが、物納から金納への切り換えによって急速に廃れはじめていた。3度目の渡琉で訪れる与那国島では藁算が未発達だったが、カイダー字と呼ばれる独特の記標文字が替わりに使われその記憶も失われるのは時間の問題であった［須藤 1937-d, 須藤 1940-b］。これらの記録保存が動機となって、須藤は39年まで毎年の調査旅行を重ねることになる。

34年の冬に台北帝国大学で日本学術協会の研究大会が開催され、須藤はその夏の最初の調査旅行の成果をはやくも報告している［須藤 1935-b］。翌35年にはこれに加筆して、同大土俗・人種学教室から刊行されていた『南方土俗』に寄稿した［須藤 1935-d］。2度目の渡琉で収集した黒島と新城島のデータを加味した続報も同誌に寄稿したが［須藤 1936-e］、読者からの情報提供を期待して、沖縄県教育会から刊行されていた『沖縄教育』にも次々と原稿を送っている［須藤 1935-c, 須藤 1937-a, 須藤 1937-b, 須藤 1937-c］。調査報告と平行して、八重山で入手した算術書の翻刻［須藤 1936-a, 須藤 1938］と解説［須藤 1936-b］もおこなった。1930年代後半の彼の精力的な仕事は近世琉球数学史の解明に大きな貢献を果たしたといえよう。

2　民俗調査

しかし、須藤の沖縄研究は専門領域内にとどまらなかった。「沖縄へ行くと、いろいろのものが眼につき、注意と興味を喚起されずに居られない」彼は、「思わず、或時はむしろ進んで、道草を食い横道にそれた」という。そのような「横道」の一つが民俗学であった。八重山の郷土玩具の紹介［須藤 1939b］や、石敢當と呼ばれる厄除けの石碑の比較考察［須藤 1939a］があり、さらに、西表島の豊年祭の調査日誌［須藤 1940-c］がある。また、刳舟の考察や伝説の紹介を織り込んだ紀行文［須藤 1937］にも民俗学的関心があきらかだ。

このような道草には直近の先例があった。「南国の珍しい風物が強く私の心を捉えてしまって…殆ど毎年のようにこの島を訪うた」とか、「副産物として、土俗に関するいろいろ面白い垣覗きをすることも出来た」とかいうのは、一見すると須藤の言葉のようだが、実は、こう述べているのは九州帝大の動物学者・大島廣である［大島 1947 : 73-74］。須藤より2年早く、1932年の秋、台北での学会の帰路を利用し、2週間かけて八重山、宮古、沖縄本島を巡ったのが最初の沖縄調査だった。ウニ・ナマコ類の専門家である大島は、漁師に珊瑚礁を案内させたり、海産物業者の聞き取りをしたりしているが、同時に、屋敷地を囲む石積みや、人々の結髷、婦人の服装や手甲の入れ墨、亀甲墓の造作と古い葬制、そして藁算にも旺盛な興味を示している［大島 1933-a, 大島 1933-b, 大島 1933-c, 大島 1933-d］。

本格的な調査の糸口を掴んだ大島は、翌33年と34年に帝国学士院の助成を受け八重山を再訪する。これに同行した一人が同僚の江崎悌三であった。昆虫学者であった江崎は波照間島と与那国島を訪れ、その記録を「八重山遊記」として発表している。動植物の観察が大島廣の紀行よりも後退し、島人の暮らしぶりと歴史や伝説の紹介が前景化して、自然誌家というよりは民俗学者の筆になるものにみえる［江崎 1934, 江崎 1935-a, 江崎 1935-b, 江崎 1935-c］。

一歩先んじた大島や江崎を須藤が意識していたことは間違いない。初調査のときから与那国行き

を望んだ須藤だが、翌年の再訪でも適当な渡船がみつからなかった。しかし、石垣で船待ち中に新城島が「処女島」であることを知り、黒島を経由して新城島に向かう行程に切り替えている。「中央の学者が誰もまだ行っていない島だと聞いて私の食指は直ちに動いた」と記す彼は、「中央の学者」に「たふけんのものずき」とルビをふった［須藤 1935-a：2, 11］。

満を持して臨んだ3度目の渡琉で彼は与那国島上陸を果たすが、江崎の紀行と、江崎も参考にした本山桂川『与那国島図誌』が「伝説や土俗の全貌を語り尽くして」いて、自らの紀行が屋上屋を架す観のあることを素直に認めて記している［須藤 1936-d：10］。実際に、彼が見学したのは江崎とほぼ同じものだ。例えば、起源神話にまつわる犬座鼻高台や、過剰人口殺害の伝説が伝わる人升田（トウングダ）や久部良割（クブラバリ）、平家落人集落の遺構という屋島墓、王府時代の燈火通信台であった屋手久（ヤディク）といった史蹟であり、クミャーと呼ばれる幼児を背負う布や、各屋敷に備わった石盥など島特有の生活様式である［須藤 1936-d, 須藤 1936-c］。

生物学者や数学者によるこのような民俗調査をどのように解するべきだろうか。当時、沖縄本島から遠く離れた八重山を物見遊山で訪れる者は少なかった。離島には通信設備がなく、不定期運行の発動船に行き会う幸運を必要とする。宿泊施設も乏しく、須藤は民家に世話になったり、学校の空き教室で自炊したりしている。けれども、離島であっても既に国家のシステムのなかには編入されていて、未知の世界に分け入る探検家が負うような困難はなかった。江崎や大島が便乗したのは、簡閲点呼官を運ぶ発動船である。西表島で、大島は、学童たちが道すがらアメリカ黒人歌謡を口ずさむのに驚いていることからも、学校教育を通じた島外文化の流入の程度が推し量られよう。須藤は、与那国には台北高校生2名と九大生1名を引率し、西表の豊年祭には京大生を同行させている。当時の八重山離島は、青年の冒険心を満たす程度には未知の、しかし、夏期休暇の学生が訪れる程度には安全な旅行先だったということであろう。

観光以上であっても探検未満の八重山紀行が矢継ぎ早に活字化されたのは奇妙にみえる。大島の「八重山・宮古諸島採集旅行記」などは、周到な準備を欠いた観察だったにもかかわらず専門誌『植物及動物』に連載されている。当時、沖縄の民俗研究にはすでに、伊波普猷の『古琉球』を起点にすれば20年以上の、柳田国男の『海南小記』からでも10年ほどの蓄積があった。同時期に限っても、32年初めに浜田耕作の「沖縄の旅」や、翌年末33年に三宅宗悦の「南島の旅」などがあり、34年初夏には、江崎や三宅も参加したアチックミューゼアムによる薩南十島調査があったが、これらは皆、沖縄本島や奄美群島の調査である。郷土に根ざす研究者はもちろんいたのだが、先島地方にまで足を伸ばす「中央の学者（たふけんのものずき）」が少なかったのである。大島は「他日同地方を訪はうとする方々のために幾分の参考」となすために「浅薄杜撰な一旅行者の見聞記」を発表すると言い［大島 1933a：70-71］、須藤は先行研究の落穂拾いをし、また直近の変化を記して「この島（＝与那国）に遊ばんとする人士の参考に供したい」という［須藤 1944：30］。巡見録にすぎないような紀行文であっても調査旅行者の手引としての需要があったようだ。

3　異国船来琉記

須藤の沖縄研究の今ひとつの柱が、近世末のヨーロッパ人による琉球航海記の紹介であった。工学部船舶科の卒業生で、日本海事史学会の創設者である彼にとっては民俗学ほどの「横道」ではなかったかも知れない。

いわゆる異国船による琉球探検記として最も有名なのは、ライラ号艦長バジル・ホールの航海記である。1816年、特命大使を乗せた巡洋艦アルセスト号に随伴して英国を発ち、大使の北京往復の間に東シナ海の探検をおこなった。ホールによるその記録『朝鮮西沿岸及び大琉球探検航海記』

（1818）とアルセスト号艦医マクレオッドの航海記をもって、「初めてヨーロッパは、自分自身の目を通して見た、一通りまとまった琉球国に関する知識を持つことができた」のだという［須藤 1940-g：10］。それは、争いも貨幣も知らぬ人々が住む礼節の国という牧歌的なイメージであったが、帰路に立ち寄ったセントヘレナ島で、武器の無い国の存在をナポレオンに伝え、彼を驚愕させたという逸話が加わって、琉球への興味を掻き立てた。ホールの航海記は直ぐにオランダ語に翻訳され、次いでドイツ語版とイタリア語版が出版されている。琉球数学の紹介を一通り終えた須藤は、1938 年から『沖縄教育』誌上に和訳の連載を始め[1)]、1940 年初めに単行本『バジル・ホール大琉球航海記』として出版した。

この翻訳作業が切っ掛けとなり、ホールと前後する異国船来琉についても調査を進めることになる。ホール以前で重要なのは、ブロートンの『北太平洋探検航海記』（1804）で、琉球を実際に訪問し確実で詳細な記録を残した最初の人物である。1796 年にプロビデンス号で宮古島付近を航行中に座礁してしまうが、島民に救助され、出直した航海で那覇を訪れた。ホール以後には、ブラッサム号を指揮したビーチの『太平洋及びベーリング海峡航海記』（1831）や、ベルチャー艦長の『サマラン号航海記』（1848）および艦医アダムスの附録『琉球博物誌』などがあった。総督府図書館には、逓信省で海事法制に関った後に台湾総督となった内田嘉吉の文庫があり、台北帝大の所蔵本を合わせると、意外と多くの類書にアクセスできたようだ。

ビーチの航海記については、1940 年秋に紙上連載を始める旨の解説を須藤は書いているが、「『台湾の新聞』に掲載」されたというこの解説記事の再録によれば「都合で解説のみしか発表されなかった」という［須藤 1974：91］。ところが、実際には、『月刊文化沖縄』に 8 回にわたるビーチ航海記の連載がある［須藤 1941］。40 年夏に那覇で創刊され、44 年初めまで刊行された総合雑誌である。ずっと後年に琉球新報に連載するビーチ航海記［須藤 1965］はほぼ完全に翻訳が改められていて、この戦前の翻訳との関係は分からない[2)]。

サマラン号は 1843 年に先島地方に現れ、八重山・宮古両諸島を探検した。翌年の東南アジア航海でも先島を再訪し、沖縄本島を経由して長崎に入港し、帰路にも先島に立ち寄っている。類書に先島記事は少なく、ベルチャーの航海記は貴重なので何れ訳出すると須藤は予告したが、管見の限り確認できない。訳出されたのは、アダムスの博物誌の方で、そのうち「那覇見聞録」の部分のみである［須藤 1940-a］。なお、この博物誌は昆虫相の優れた記述を含むため、江崎悌三が既に紹介記事を書いていた［江崎 1933］。関心の所在は異なるが、航海記の分野でも須藤は江崎に先鞭を付けられていたことになる。

1942 年に転勤で東京に戻った須藤は、台湾時代に発表した沖縄研究を寄せ集め『南島覚書』（1944）を出版した。前書きで彼は、それまでの延長として沖縄研究を続ける意欲が失われ、全く異なる立場と観点から沖縄と関係していきたいと述べている［須藤 1944：5］。

須藤が再び沖縄を訪れるのは 1955 年のことだが、『南島』編集担当の一人であった川平朝申に宛てた書簡類が残されており、この間の状況がよくうかがえる。転勤早々には、台北時代を懐かしみ「なんだか今の生活の方が夢の様です」（那覇市歴史博物館所蔵川平家文書 10000556「書簡 8」須藤利一より川平朝申宛、42 年 4 月 7 日、以下同一資料）と述べているが、同年暮れの書簡には、「（比嘉）春潮さんが毎月集りをあっせんして下すって楽しい一夜を持っています。みんな気持ちのよい人ばかり集まってきます」（12 月 26 日）とあり、沖縄出身文化人のサークルに迎え入れられたことがわかる。しかし、44 年度には、新設の大日本滑空工業専門学校に転勤となり、敗戦は茨城で迎えることになった。

川平は沖縄へ引き揚げ米軍統治下の文化行政で活躍するが、中国戦線から復員した弟の朝宜が須

藤の下に身を寄せたこともあって、須藤との文通は戦後も途切れることなく続く。沖縄再建に参加したいが非力なので、「驥尾に付す」の策で（47年6月21日）、一高に戻って東大教養学部で教職に就いた須藤は、川平から来沖を促されていたらしく、琉球大学が開学した1950年の通信では、「博士号でも持った資格のある人士」を招聘すべきであり、「アメリカ側に対しても立派な先生を欲しい」として謝絶している（50年1月20日）。

55年に実現する須藤の沖縄訪問は、ホール『大琉球航海記』の再版を記念した講演旅行であった。柳宗悦の勧めで朝鮮の章も加えた改訳原稿は、版元の経営難で数年留め置かれてしまい、結局、琉球新報社長・親泊政博の仲介で日の目を見ることになった。この間に結核予防会に転じていた川平は、米国視察に赴く途上で須藤との再会を果たし、復路には、比嘉春潮や仲原善忠が集った須藤宅での再版祝いに駆けつけている。謹呈本の栞に須藤は、「この本の再誕の喜びを習志野の小居で皆さんとわけ合う夜、奇しくも川平親方のハワイより帰り来り会す。因縁の深きに驚かずんばあらず」（55年10月2日）と記した。

これが縁となって、須藤は琉球新報紙上に、モリソン号「パーカー訪琉記」、マーケーザ号「ギルマードの大琉球見聞記」、ペリー艦隊の「モローの日記」、そして永らく待たれていた「ブロートンの航海探検記」と異国船来琉記の翻訳を次々と連載する。67年には、宮田俊彦、宮城栄昌、そして台北時代からの学友の小葉田淳らとともに「沖縄の総合的研究」プロジェクトを組んで造船・海運資料の調査に訪れ、川平には彼の故郷である伊平屋島で数学史関連資料も探求したいと伝えているが、この頃より体調を著しく崩し、これが最後の沖縄訪問となった（67年10月31日）。

Ⅲ　比嘉盛章―沖縄のエンサイクロペディア

1　立志伝中の人

須藤利一の与那国調査が、大島廣や江崎悌三に一歩遅れたものであったことをみたが、この遅れは須藤にとってむしろ幸いとなった。比嘉盛章と出会うからである。与那国小学校校長の比嘉は、大島や江崎の来島時には未だ赴任していなかった。「私の与那国島訪問の収穫は…（藁算やカイダー字の）資料だけでなく比嘉盛章氏にめぐりあったことだった」［須藤 1966：21］という須藤との交際は比嘉の台北に移住を導き、「近所に住み合って、朝な夕な沖縄や琉球のはなしに終始」する間柄へと発展する［須藤 1955］。

比嘉については業績も生涯も未詳部分が多いが[3)]、その前半生がうかがえるのは、「文部検定に合格せる比嘉盛昇（ママ）君」という『沖縄教育』の記事である。これによると、1885年に首里で生まれ、最終学歴は小学校高等科卒である。しかし、働きながら初級教員免許を取得して教壇に登り、「敢えて其位置に安ぜず、進みて止まざるの精神」で順次に上級の免許を取得し、記事の書かれた1913年までに小学校本科正教員となっていた。自信に溢れるあまり謙遜を欠く態度が上司に疎まれ左遷の危機もあったという。そんななか、難関試験として知られる中等教員検定に合格したことを、沖縄教育界に「梅花一輪魁したるが如し」と同記事は讃えている［沖の島人 1913］。14年度には摩文仁小学校校長に栄転するが、この間も受験勉強を止めず、翌年には先の教育科に加え倫理科免許も取得した。

けれども、1916年、30歳を越えたばかりの比嘉は依頼退職し学校を出てしまう。「今や雌伏しつつあり、其将来や蓋し刮目に値す」とは同年発行の人事録筆者の言だ［楢原 1916： 530］。翌年末より毎年のように『官報』に出る彼の改名「比嘉盛章」は、農工倉庫、糸満馬車軌道、沖縄貯蔵食品製造、沖縄鉄工所、そして沖縄銀行という株式会社の変更あるいは設立登記者としてのそれで

ある。このような株取引と同時に政界にも参入し、21年に市制が施行され高嶺朝教が市長に就いた首里市の初代助役となった［首里市役所 1931： 26］。熱を入れた政治活動であったらしく、24年には、中央政府の転換にともなって起こった県内の政争に顔を出し、『沖縄タイムス』紙上で、首里門閥の首魁・尚順男爵を「県民の公敵」と批難し（7月8日）、相手陣営の『琉球新報』紙からは「裏切り者」とか「獅子身中の虫」という批難を受けている（7月15日）。翌年には、任期満了で勇退した高嶺と一緒に市政を降り、しばらく足どりが消えるが、評論家の古波蔵保好の回顧には、31年頃の話として、古くからの新聞人だが那覇で電気屋を営んでいて、11月に創刊される沖縄日日新聞の主筆として復活する比嘉盛章が登場するので［古波蔵 1989］、ジャーナリズムに転じていたらしい。

この間の24年8月に方言学者・宮良当壮が助役室を訪れている。この調査旅行で宮良は、首里の山中に阿弥陀堂を建てて隠れるように暮らす傀儡師の家族を知り、翌年にその聞き書きをまとめた。よく知られたデビュー作炉辺叢書の『沖縄の人形芝居』だ［宮良 1925］。「磁石の前に置かれた鉄片のやうに引付らるる思いしつつ…一日の中に三回も繰り返して読みました」という比嘉は、しかし、この興芸人の来歴や社会的役割、宗教的性格について見解を違え、宮良の粗雑で不徹底な分析と独断に失望したという。書簡形式で書いた書評は、方言学者に対し、「果たして琉球語に御造詣ありやを疑はざるを得ない」という酷評であった［比嘉 1925］。

壮年期の比嘉は、このような沖縄文化研究者とりわけオモロ研究者として登場する。伊波普猷の校訂本が出版されオモロ研究者が増えるなか、沖縄では32年8月頃から島袋全発の自宅に比嘉や世礼（せれい）国男ほか数名が毎週集うようになった。島袋の講述をベースに議論を進めるというスタイルであったが、古典音楽を嗜む者が多く、比嘉は屋富祖流の、世礼は野村流の奏者で、月例で演奏会も開いていた。唱歌法への精通は展読法を生む。オモロは文字記録でのみ伝わっていたが、付記された記号を反復記号とみなし、本来の歌謡を復元する方法である。島袋全発の「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」（1933）が代表的な論文だが、そのなかで彼は、「郷土音楽より暗示を得た」比嘉により記号の意味を「釈然として示教されたのは、何という幸福なことであったか」と述べ、展読法発見への比嘉の貢献を明らかにしている［島袋 1933： 52, 48］。新オモロ学派と呼ばれるこの研究会の成果は、「画期的な大発見」としてセンセーショナルに報道をされたため、オモロ研究の第一人者・伊波の反感を買い論争を招いた。その発端となった報道記事を掲載したのが比嘉の沖縄日日新聞であったという［島袋 1976］。

オモロ読解法についての論争は純粋な学術論争に収まらなかった。1880年代後半に生まれた比嘉（85年生）や世礼（87年生）、島袋（88年生）と、伊波（76年生）には世代的な隔たりがあった。折しも帰郷中であったことにより、「おもろ新人諸君」の発言をいち早く知った東恩納寛惇は、「今少しの謙譲な態度を以て是のおもろ学創置者（＝伊波）の偉大なる学徳に対されん事を切望に耐へない」と苦言を提する[4)]。しかし、島袋全発論において屋嘉比収は、伊波や東恩納と同世代の真境名安興が新オモロ学派に好意的だったことに注目して、中央に出て活躍する沖縄研究者と、沖縄に留まって研究する者というもう一つの隔たりを指摘し、後者の前者に対する自負心が、不遜にも響く物言いを導いたとみている［屋嘉比 2010：130］。

いずれの隔たりに比重があったのかはともかく、意識的に沖縄に留まった島袋とは異なり、比嘉は一旦は中央への進出を目指し、この論争と前後して上京し柳田国男や折口信夫のもとを訪れる。柳田の側にいた比嘉春潮によれば、盛章は自著出版の斡旋を頼んだが体よく断られたという。盛章の草稿には、たとえば、伊波のオモロ研究は「根本の出発点を誤ったのでとうてい弥縫や収拾では間に合わず、根本的立て直しを必要とする」といったような挑戦的な文句が並んでいたようだ（比

嘉 1965：45)。

春潮の回想には、柳田が盛章の「意図の低俗さと方法論の非科学的な突飛さにあきれられて取りあおうとされなかった」という、より否定的な言い方をしたものもある［比嘉 1969：194］。この原稿は結局は上梓されなかったので、彼は、後に発表された「おもろの研究」に触れ、「別に変わった研究でもなく、かえってわれわれ素人の目から見てどうかと思われるところさえあった」［比嘉 1971：351］と低く評価しているが、オモロに通じた島袋全幸によれば、盛章のオモロ解釈は必ずしも珍説ではなく、後年の研究水準に照らしても遜色ないものであった。盛章自身の語る上京の顛末は、『沖縄教育』第 203 号掲載の「柳田・折口両先生の御言葉を紹介しておもろ研究を勧奨す」に詳らかなはずだが、残念ながら現物を確認できない。

いずれにせよ確かなのは、この時期の比嘉盛章が毒舌家だったことだろう。同志の島袋全発と比べても文体が攻撃的であることは歴然としていて、皮肉を多用した挑戦的な口調で政論を交していた時代を彷彿とさせる。たとえば、上京の翌年に新聞連載された「古琉球の国都は首里か浦添か」という論考がある。「うらそえ」は「浦襲い」すなわち支配地を見下ろす拠点だという推測から首里説を覆そうした伊波や東恩納に対し、定説を守る比嘉は、独自のオモロ解釈も加えてこれに反駁を加える。立論自体の是非は置いて、彼の口調は次のようなものだった。

> これ程迄に完全に組織された一大総合伝説［＝首里説］を、僅かに思付かれた浦添の語源に出発して否定し去るということは中山城［＝首里城］がドンモリ返って那覇の漫湖を埋めた程の脅威である。…電灯の光を以て太陽の光を覆はんとするが如き無謀である［比嘉 1933：21］。

後に東恩納が書いた追悼記が比嘉の半生を的確にとらえているようだ。東恩納によれば、比嘉は独学で教員免許を取得するような「立志伝中の人であった。けれども彼の立志は、遂に立身とまでは熟さなかった。それは彼の圭角の為に、世路のすべりがよくなかったから」であるという［東恩納 1952：22］。

2　新天地台湾

志しを達せず帰琉した比嘉は教職に復し、八重山に赴任した。1935 年秋から与那国小学校校長を、37 年度からは西表小学校の校長を務めている。西表小学校の生徒であった小底貫一によれば、「性格豪放、能弁で学究肌」の比嘉は「卓越した指導力」を発揮しており、その訓辞は戦地で思い起こすほど印象的であったという［小底 2002 ： 67］。オモロ研究も、挫折にめげず続けていた。沖縄本島の言語では解釈できなかった言葉が八重山の言語を知って釈然としたと語っていたというから、琉球の言語学の研究の為に自らすすんで離島への赴任を望んだようだ［須藤 1966：21］。

須藤利一に出会ったときの比嘉はこのような境遇にいた。台湾の学界の様子を聞いて、台北で再挑戦する可能性を見出したはずだ。「琉球語による古代国語の新解釈」という原稿を須藤に託し、台北帝大の国語学者・安藤正次の批評を求めることになった。比嘉によれば、記紀万葉の難解語句は、国学者が近世日本語の語義や語感でこれを解釈した結果である。表題からうかがえるように、比嘉の論考は、オモロ研究から得た琉球語の語義や音韻、文法を参照してこれらの難解語句を解くものであった［比嘉 1937-a, 比嘉 1937-b］。同じように土俗・人種学教室の移川子之蔵にも論文原稿を送り、「琉球土俗より見たる高天原民族の北上説」が『南方土俗』に掲載される。この論考で比嘉は、比較言語学により日琉を同一民族としたうえで、オモロにみられる「ニライ・カナイ」

写真１　台湾の比嘉盛章（右端）と川平朝申の父・朝平（中央）。1940 年代初め。（那覇市歴史博物館川平家文書 10002117）

という海上楽土が南方に想定されていることを論証し、琉球人ひいては日本人の南方起源を説いた［比嘉 1937-c］。

さらに翌 37 年 11 月には、比嘉は台北へ出かけて行って安藤や移川に直接会う。移川が主宰する南方土俗学会の例会に招かれ、「私の将来の研究方針に就きまして、親しくご指導を仰ぎたい希望を以て参った」と自己紹介するが、比嘉はすでに 52 歳になっていて、移川とは同年齢だった。急な依頼を受けて、熟知している「沖縄の音楽舞踊に就て」［比嘉 1938, 比嘉 1939］という演題で話すが、実は古典音楽についてだけ話し、舞踊については、後に野村流の池宮城喜輝が来島した機会に実演を付けて改めて講演される［比嘉 1942］。安藤や移川の反応は悪くなかったようで、研究者として再起する見込みをつけた比嘉は総督府文教局編修課に嘱託職を見つけ 40 年春より台北の住人となる。6 月 5 日付で川平朝申一家に宛てた手紙には、沖縄で職探しをしようとしていたが「台北の先生方の御好意に我ままを申すのも男らしくない」（那覇市歴史博物館所蔵川平家文書 10000567「書簡」比嘉盛章より、6 月 5 日）とあり、須藤らの斡旋があったことがわかる。

次節で詳しく述べるが、この時までに『南島』創刊号の原稿がほぼ揃っており、台北での編集作業が始まっていた。5 月中旬の出版予定が印刷所の不手際で遅れたのだが、これが「結局本誌の幸福になった」と須藤は言う。「由来記の校合や語解などが比較的短日月に且つ思い通りに、出来たのは全く比嘉さんが来られたため」だったからだ［須藤 1940-f：107］。オモロ解釈には否定的だった比嘉春潮も旧記類に関しては「八重山に詳しい盛章さんが校閲しているので安心して読める」と評したように、比嘉盛章が編集の主軸となったことで、『南島』は良質の沖縄研究誌となった。

10 月より須藤宅で毎週オモロ研究会が開かれ、雑誌『南島』の実質的な定例会合となる。比嘉と須藤以外の参加者は、台北帝大の金関丈夫と小葉田淳、帝大予科の木藤才蔵と台北高校の松村一雄、師範を出たばかりの三島格（いたる）、そして先にも触れた川平朝申であった。川平を除けば琉球語に通じた者はいない。比嘉が訳文草案を準備して講釈を加え、それについて議論するというスタイルだった［松村 1942］。自負心が祟って世渡りに苦労してきた比嘉にとって、ようやく辿り着いた学究としての自己実現の舞台だったろう（写真１）。須藤の追悼記によれば、「沖縄研究のために集った人々との交際は、氏に非常な活気を与え、吾々も沖縄のエンサイクロペディアの存在を心から有りがたがつていた」という。ただ、「氏にとっては最も生彩と活気にみちた一時代」はほぼ 2 箇年間の短いものであった［須藤 1955］。

Ⅳ 『南島』掲載記事解説

1 編集企画と出版の遅れ

本章では、『南島』の掲載記事を整理するが、まず、『沖縄大百科事典』によって雑誌の概要をみておこう。

1940年から44年まで台湾において発行された沖縄全域を包含する郷土研究誌。編集顧問は喜舎場永珣、比嘉春潮、金関丈夫ら。須藤利一を中心に比嘉盛章、宮良賢貞、川平朝申らが編集に携わった。沖縄の歴史・民俗に関する資料の収集、古文書の調査・復刻を主とし、第1集（1940）は八重山特集、第2集（1942）は『李朝実録』の解説やオモロ研究など、第3集（1944）は宮古特集。戦争勃発のため44年9月、第3集で廃刊。

写真２　須藤利一（右）と川平朝申（左）。昭和42年３月、転勤で離台する須藤との記念撮影とおもわれる。（那覇市歴史博物館川平家文書 10002225）

4年間にわたり緩慢に刊行されたようにみえるが、実際には、毎年2回発行の見込みで原稿の準備が進んでいたのに、日米開戦の影響で出版が大幅に遅れていった。

雑誌創刊の計画が持ち上がったのは1939年8月21日、石垣島を調査旅行中の須藤と、これに同行した西表小校長の比嘉盛章、そしてホスト役の喜舎場永珣の間で話がまとまったという［須藤1940-c ： 100］。このとき、彼らの念頭にあったのは、謄写版の八重山研究誌を数十部刷って同好者に配るという小規模な計画であった。タイトルも八重山の現地読みである『やいま』を想定していたが、沖縄本島から対象地域の拡大の希望があり、恐らくは島袋全発の提案でタイトルを『南島』として台北の野田書房による商業出版として40年8月に第1集八重山特集が刊行された［須藤 1966：22］。41年1月現在の「南島会員名簿」が残っていて、合計511名の購読契約者が記載されている。発行部数は600部前後であったとみてよいだろう（川平家文書10001540）。

第2集では宮古特集が企画されていた。上記の名簿の裏表紙に載った広告によると、企画されていた第2集は、実際に発行された第2集と第3集を合わせたものとほぼ等しい。41年4月の発行を予告していたが、須藤によれば、宮古以外の原稿が意外に多くなったので、分冊して先に出したという。とは言え、この第2集が発行されたのはそれより一年以上を経た42年5月であった。

純粋な宮古特集となる第3集は、前年末に書かれたその編集後記では42年の「4月上旬には断じて発行する」予定であった。ある程度の編集が進んでいたことがわかるが、結局、第2集を上回る遅刊となって44年9月に発行される。

主な原因は編集陣の解体にある。42年4月に第一高等学校への転勤で須藤が台湾を離れてしまう（写真2）。翌月には川平に宛てて、『南島』の「第三輯も殆ど校正が了ったやうにききましたから、やがて出き上がるのを楽しみにしています」と書き送り、合わせて、「編集その他の後始末は中村忠行君に頼んであります」と伝えた（前出「書簡8」、5月29日）。中村は台北帝大で国語学を学び母校で助手を務めていた。言語学者チェンバレンへの関心から、その祖父バジル・ホールについての記事を『南島』に寄せたが、沖縄研究については素人であり当初より編集に不安があったと

いう。8月の書簡では、出張のついでに次々と須藤を訪ねる友人知人に松村一雄が混じり、『南島』は「引きうけてやる」と言って帰台したので、続刊について彼と相談するよう頼み、他方で、相次ぐ遅刊のためか関係が悪くなった野田書房に替わる本屋を東京で物色しようとしていることがわかる（8月19日）。中村による第3集の編集後記によれば、校正は一人で担当したが、木藤や三島、ドイツ語の石本にも協力を仰いだという［中村 1944］。

須藤を追うかのように比嘉盛章も台湾を離れた。もともと総督府の職場は彼に合わなかったようだ。翌43年5月の川平宛の書簡で須藤は比嘉の近況に触れ、比嘉の著書出版が遅れたので彼の上京が延期されたようだが、「漫然とあこがれて出て来られても失望の方が大きいでしょう」と述べている。この書簡からは松村と小山が比嘉のために淡水中学の職を世話してあったこともわかるが、結局、比嘉は沖縄昭和女学校で教職に復すことになった。比嘉の「著書」というのは、『助詞の研究』というもので冨山房から出版する予定であるが、「書き振りが、例の比嘉さん式なので」出版許可の取得に不安があり、須藤と石黒魯平で修正を加えていたという（10月1日）。那覇空襲の後の44年12月には「比嘉さんはどうされたか、いつも案じております」（12月7日）と須藤は川平に書き送ったが、九州の山中に疎開して沖縄戦からは逃れられたようだ［須藤　1955］。熊本に居た息子は台北高校の卒業生で、須藤は二人連れで本島北部の調査旅行もした仲だったが［須藤 1937］、戦死してしまい連絡が途絶える。しかし、46年5月の『沖縄新民報』に「九大法文学部佐久間博士を中心に琉球文化研究会が組織され比嘉盛章氏等がその会員として参加した」（5月15日）という記事があり、翌年1月の同紙には大分在住県人会会長であった彼の訃報が掲載されている（1月15日）。最後の最後まで学究であり、社会的指導者であらんとした人生だった。

須藤や比嘉が台湾を離れたのと同じ頃に宮良も、海軍省特務部令を受け一種の宣撫工作のために海南島の小学校に転出してしまう［三木 1989：220］。結局、創刊時の編集担当で台湾に残ったのは川平のみだったが、これより先41年6月に召集を受けていた。幸に配属先が台湾軍司令部だったので、勤務の合間に編集作業に顔を見せるぐらいはできたようだ。

弾雨をくぐりながら印刷屋に通ったという第3集が出た1944年の秋には、次集刊行の目処が立たないほど出版環境が悪化していたが、原稿の準備は早くからできていたようだ。41年末の時点で、第4集は久米島特集となる計画が固まり、須藤はすでに離台前に仲原善忠から「久米島のオモロに就て」という原稿を受け取っている［須藤 1966：23］。43年7月には「南島第四輯の原稿がまとまり、本日、一所に送りました。こんどは中々充実しています」と須藤は川平に書き送っている（7月19日）。川平が編集をはじめたが、連日の空襲で作業が進まないうちに終戦となってしまった［川平 1977］。

2　各集の主な内容

『南島』の巻末には簡単な会員規約が記されているが、これと並んで自己を定義する次のような条項がある。

> 一、沖縄の郷土史　まさに湮滅せんとする南島特異な土俗の調査記録。古文献の蒐求覆刻。その他、言語・文学・芸術・歴史・自然科学一般に亙る研究の収録。

ここに示されているように、『南島』に収録された記事は、所謂サルベージを目的とした民俗調査報告と古文書の翻刻に主眼を置いたものであった。明確に研究報告と資料翻刻を両軸とした形式は、郷土研究誌『南島研究』を先例としたものだろう。以下では、第1集から第4集の掲載記事

写真３　八重山調査中の『南島』同人たち。前列左より、川平朝申、瀬名波長宣、木藤才蔵。後列左より、正木任、宮良賢貞、松村一雄。1940 年７月、八重山測候所にて。（那覇市歴史博物館川平文書 10002271）

を調査報告、翻刻および翻訳、翻刻・翻訳文献の解説、文学（オモロ研究）、その他というカテゴリに分類して示し、主要なものについて簡単に内容を紹介する。

【第１集　八重山特集】

調査報告	西表島の節祭とアンガマ踊	比嘉盛章
	爬龍船の神事（黒島）	喜舎場永珣
	黒島六段帆考	宮良賢貞
	小浜島のニロー神	宮良賢貞
翻刻・翻訳	八重山島由来記	比嘉盛章
	八重山島大阿母由来記	比嘉盛章
	八重山島諸記帳	比嘉盛章
	慶来慶田城由来記	比嘉盛章
	進貢接貢船並朝鮮船異国船日本他領の船漂着破損等の時在番役々公事	瀬名波長宣
	サマラン号八重山島来航時の記録	正木任
	アダムスの那覇見聞録―サマラン号航海記附録	須藤利一（訳）
文献解説	慶来慶田城由来記について	比嘉盛章
	諸由来記主要語句解	比嘉盛章
	（サラマン号来琉）附記	須藤利一

八重山研究誌として企画された第１集の寄稿者は八重山郷土研究会のメンバである（写真３）。1934 年８月に石垣で発足し、会長の岩崎卓爾（1869–1937）や副会長の喜舎場永珣を筆頭に八重山の地誌を研究している人々が集った。町制 10 周年記念事業の『石垣町誌』（1935）の編集と関連した組織化だったようだ。須藤は最晩年の岩崎から研究会のメンバを紹介されたのだが、岩崎は『南島』創刊を見ずに他界している。喜舎場（1885–1972）は、炉辺叢書に『八重山島民謡誌』（1924）を上梓した郷土史家であり、当時は、学校を早期退職して郷土研究に専念していた。喜舎場と同世代の瀬名波長宣（ちょうせん）も、若い正木任（つとむ）も、岩崎に可愛がられていた測候所職員である。瀬名波は後に所長となり、八重山の自然誌・民俗誌も残しているが、正木は大戦末期の出張中に潜水艦の

攻撃に合い夭折してしまう［大島 1947］。

宮良賢貞は、すでに触れたように『南島』の編集も担当している。三木健の評伝によれば、1901 年に石垣島で生まれた宮良は、沖縄師範を卒業後、八重山各地の小学校で教鞭を執っていたが、32 年に八重山教員赤化事件に連座して免職処分を受けてしまう。37 年に一旦は復職するが、39 年 8 月に辞職し、翌 40 年 7 月からは台北州の公学校訓導になる。この間、創立五十周年事業で石垣小学校に郷土館が付設され、復職後に同館の担当となっている［三木 1989：205–234］。調査旅行に訪れた須藤は宮良の案内で郷土館を見学しているから、比嘉と同様に須藤との出会いが台湾移住に繋がった可能性もある。

『南島』の調査報告は、彼らの地の利を生かした観察により書かれているものが多い。第 1 集では、宮良にとっての黒島や、比嘉にとっての西表は、教員としての勤務先である。第 2 集の前新加太郎の与那国や宮良の竹富の報告も、現地校の教員という同様の立場での観察によっている。比嘉は西表の節祭と沖縄本島の八月祭の類似を説いているが、比較対象の摩文仁村も嘗ての彼の赴任地であった。

興味深いのは、比嘉が観察した 39 年の西表の節祭行事は、彼が 17 年ぶりに復活させたものだったことある。廃止の原因は集落内の争いだったが、「文明人のなすべき当然の処置」ともみなされていたところへ、「一昨年以来好古癖の小学校長があって、盛んに之れが復活を慫慂した結果、今年より旧慣に則り盛大に行われるようになった」のだと述べている［比嘉 1940：7］。第三者のような書き方をしているが、37 年に西表小学校校長に着任したのは比嘉自身である。

この節祭を創始したと伝えられる人物を開祖に戴く旧家の歴代当主の事跡録が「慶来慶田城由来記」である。西表と石垣にそれぞれ写本が存在し、石垣本を宮良がすでに活字化していたが［八重山郡教育部会 1931］、比嘉の西表本によって訂正し解説を付した。「八重山島由来記」は開闢神話と御嶽の神々の記録であり、「大阿母由来記」は王国制度に編入された御嶽の司祭者に関する規約、「八重山諸記帳」は年中行事と各島の特産物を記した地誌である。「旧家に虚しく秘蔵」されていたこれらの史料の翻刻には、近年没した岩崎のコレクションが地元に残らず台湾の遺族に移ってしまったことも念頭にあった。

【第 2 集】

調査報告	与那国島の童謡	前新加太郎
	孤島竹富覚書（八重山）	宮良賢貞
翻刻	李朝実録中世琉球史料	小葉田淳
文献紹介	親雲上の音義に就て	比嘉盛章
文学	久米島おもろに就いて	世礼国男
	おもろさうし研究（第 1 回）	おもろ研究会
	はじめてオモロを読む人のために	比嘉・木藤
その他	岩崎翁のことども	瀬名波長宣
	沖縄の文化を語る（座談会）	須藤ほか
	口絵解説―バジル・ホール略伝	中村忠行

第 2 集の目玉の一つは李朝実録の翻刻である。『中世南島交通貿易史の研究』（1939）を上梓しこの分野の第一人者となっていた小葉田淳が寄稿したのは、琉球に漂流した朝鮮人の見聞談記録であった。漂着事件の起きた 15 世紀は、琉球の記録文書が未だ少ない時期である。もちろん、中国使節による琉球関係の記事は既に沢山書かれていたが、冊封使の観察が及ぶ範囲は首里や那覇を中

心に沖縄本島に限定されていたし、彼らがつき合う沖縄人は上層階級の人々だった。朝鮮漂流民の報告は、先島や離島の一般島民の生活を伝える点で希有の史料となる。一部は伊波普猷が「朝鮮人の漂流記に現れた尚真王即位当時の南島」としてすでに紹介・解説していたが、原典に辿って、伊波の使った流布本の誤記を訂正している点に歴史学者としての小葉田の仕事が如実に現われている。

「おもろさうし研究」は、おもろ研究会で使用した資料をもとにした選釈集である。オモロ巻1から33首を選び、各々に訳文と脚注が付けられている。続く第3集には巻2から46首が掲載され、第4集にも連載される予定であった。

関連する世礼国男の論考は、歌唱形式の観点から展読法を反復法と再定義して、長詩クェーナを特徴づける対句法との混合と変遷を論じた長編である。1940年には「琉球音楽歌謡史論」をまとめた彼は、同年暮に川平に宛てて「オモロ研究はうらやましく思ってゐます」と書き送っている（川平家文書10000563「書簡15」，世礼より川平宛葉書、40年12月19日）。沖縄県立第二中学校に奉職していた世礼が台北の研究会に顔を出すことはできず、かつての新オモロ学派の同志比嘉との縁もあって寄稿したのだろう。

【第３集　宮古特集】

調査報告	宮古曲玉の研究	下地馨
	多良間島雑記―雨乞い・年中行事・俚諺及び方言の係結び	垣花良香
翻刻と翻訳	宮古島のドイツ商船遭難救助記念碑	江崎悌三
	独帝謝恩記念品その他	石本岩根
	（先島巡航記録（A・アダムス））	（江崎悌三）
	（白川忠導両氏系譜並に御張紙次第）	（下地馨）
	（宮古島旧記）	
文学	おもろさうし研究（第２回）	おもろ研究会
その他	宮古島民の台湾遭害	山中樵
	宮古の民謡について	川平朝建

先に触れた宮古特集の広告には、実際には掲載されなかった3本の翻刻・翻訳記事が含まれている。これを上記一覧中に括弧で示したが、白川氏と忠導氏は在地役人を輩出する宮古の旧家であり、「宮古島旧記」は、開闢神話から近世初期の伝説を収めた史書である。これらを合わせてみるならば、宮古特集は八重山特集を踏襲し「土俗の調査報告と古文献の蒐求覆刻」という構成であったことになる。

江崎悌三のドイツ商船記事は、1873年に宮古沖で起きたロベルトソン号の座礁事故に関するドイツ外交文書の紹介である。島民が遭難者を親身に救助したことから、ヴィルヘルム一世が謝恩使を送り、記念碑を宮古の港に建立した。江崎が宮古に渡った1934年には、宮古郡教育部会がこの史実を、国定教科書資料の公募に応えて送り、博愛美談として一等を獲得して再評価の気運が高まっていた。続く36年11月には記念碑建立の六十周年式典が大々的に催され、折しも日独の軍事協力の開始と重なって全国的に注目されるようになった。

江崎のドイツ語資料を翻訳した石本岩根は九大卒の台北高校教員で、この間の35年に「日本における独逸学」研究の一環として宮古に立ち寄り、沖縄でも資料調査をしている。江崎記事を補完するように、謝恩物品の紹介と、尚家文書から発掘した、謝恩品贈呈についての評定所記録の翻刻および解説を寄稿した。

近代初期を扱った今一つの記事は、台湾に漂着した宮古島民が大量に殺害された事件（牡丹社事

件）について、その顛末を日清の史料を使って述べ、台湾領有から昭和初期の改修までの被害者墳墓の変遷を紹介している。著者の山中樵は総督府立図書館長を長く務め、1930年代から戦中の在台日本人を代表する文化人である。同じく在台の兄・萬造寺龍（山中登）とともに『南島』顧問に名を連ねている。

戦局悪化のため第3集は台湾島外に郵送することが出来なかった。「皆さんの御努力で、いよいよ南島も出き上った由で、死んだ子が甦ったような気持で、早く顔が見たくてたまりません」（前出「書簡8」, 44年12月6日）という須藤でさえ手にしたのは戦後である。台湾引揚の際に松村一雄が辛うじて4冊を日本に持ち帰り、須藤と、柳田国男と比嘉春潮に分けた。「これら四部が、恐らく本土にある全部」という状態が続いたようだが［須藤 1969］、宮古島の郷土史家・下地馨が台湾の知人を通じて入手し、1969年に私宅に開設した「宮古民族文化研究所」から復刻版を発行した。同版には、オリジナル版で割愛された「宮古島旧記」の翻刻に加え、下地自身の筆になる論考と、牡丹社事件の恩人の顕彰を訴える意見文、ロベルトソン号博愛美談の紹介文、そして川平朝申の作詞に、その従姉の音楽家・金井喜久子が曲をつけた「宮古島音頭」の楽譜が附録されている。

【第4集　久米島特集】

調査報告	久米島雑記（85枚）	仲原善忠
翻刻	仲里間切旧記（124枚）	仲原善忠
	具志川間切旧記（38枚）	仲原善忠
	君南風由来記（54枚）	仲原善忠
文献紹介	旧記・由来記解説（96枚）	仲原善忠
	仲里間切旧記の研究（156枚）	仲原善忠
文学	おもろ研究（第3回）	おもろ研究会
その他	沖縄芸能誌（28枚）	川平朝申
	久米島略図	須藤利一
	B・H・チェンバレン評伝（一）	中村忠行

未完に終った第4集の内容は、「南島第四輯『久米島特輯』」というタイトルが付された目次原稿から推測することができる。罫紙一枚に手書きされたものだが、活字のポイント数や段の組み方、原稿の分量まで記入されていて、作業の進捗程度がわかる（川平文書10000689）。出版されていればその中心は「仲里間切旧記」となったはずだ。18世紀初頭に編述された古文書で1936年になって旧家から発見された。虫害が酷かったが、伊波普猷と仲原善忠が共同で修復に取り組んでいた。その内容は、御嶽の由来と神名や、儀礼に用いる唱歌や祝詞、呪文、村立ての伝説、そして年中行事である。王府の『琉球国由来記』（1713）に資するため各地で作成された類書のうち現存する最古のものである。一方の「具志川間切旧記」は、表題は同様だが内容は異なり、按司と呼ばれる地方政治支配者たちの興亡伝説集である。仲里と具志川は久米島を二分した行政単位であり、仲原はそれぞれに二種の旧記があった、つまり計4冊が存在したと推察している。「君南風由来記」は久米島に置かれた王府の女性司祭の記録である。

これら3つの史料は、仲原の手元に残された、1949年から55年の日付を付した校閲原稿を外間守善が活字にしたものが『仲原善忠全集』第3巻に収録されている。他方で、同全集刊行と同じ77年に復刻された『南島』第2集に寄せた一文で川平が、「第四輯は私一人で台湾軍司令部で編集に取りかかったが、毎日の猛爆撃のため、意の如くならず終戦となり……私は第四輯の原稿を携えて沖縄に復員した」と記し［川平 1977］、陳哲雄が「川平先生の御手許にある『南島』第四輯の原稿を拝見して、第四輯の継続発刊をおすすめした」［陳 1977］と述べていることから、仲

原の原稿には複写が存在したようだ。仲原は広島高師を卒業し、東京で教員をしていたが、久米島は彼の出身地だった。比嘉春潮の働きかけで、発見から間もない旧記を提供することになったのだという。

3　南島叢書

日米開戦直前に俄かに盛り上がる台北の沖縄研究のなかで、須藤らの南島発行所は、定期刊行物に加えて「南島叢書」の刊行も計画していた。書き下ろし単行本や、入手困難となった名著の復刻の出版企画である。

『南島』第1集の掲載広告によれば、新四六判200頁～300頁で、叢書第1編は、比嘉盛章が解説および語句解を付した『あやぐ集（宮古の歌謡）』である。宮古特集の準備から発展した企画であったが、実際に出版された形跡はない。

叢書第2編に予定されたのは慶世村恒任『宮古史伝』（1927）の翻刻であった。体系的な宮古通史の嚆矢となる著作で、南島史蹟保存会から発行され大野書店で販売された。発行所も販売所も慶世村の後援者であった砂川真修県議宅と同番地であるから、私家版に近かったようだ。数年で、比嘉春潮が「学友に示して愛蔵を誇った」と回想するような稀観書になっていた。

春潮は、「たしか昭和17年春、須藤利一氏等の南島発行所によって台北の吉田書店から僅少部数ながら再版が出て、同好の士に頒けられたと覚えている」という［比嘉1955］。一般に利用されているのは、1955年に那覇で発行された復刻や、76年の宮古の郷土史家・吉村玄得による復刻、そしてごく最近に出た新装版（2008）である。新装版の解説で仲宗根将二は、「一九三四年六月、須藤利一（当時台北高校講師）らによって台湾謄写堂から少部数「再版」（非売品）され、関係者に配布され」［仲宗根2008：383］たと述べていて、書誌情報が錯綜している。

須藤から川平に宛てた書簡でこの経緯を追うと、42年5月に装本について印刷作業の監督を川平に依頼していて、「跋」には川平が装本を担当したことを記したが、間に合うならば扉裏面にも彼の名前を記すよう促していることから（5月29日）、作業が最終段階に入っていたことがわかる。同年8月には野田書房との関係悪化で「『南島叢書』も続刊はむずかしそうです」と伝えるが、これは第3編以降のことであろう（8月13日）。ところが、およそ一箇年後になって、「史伝の表紙用の材料はすべて野田に渡してあり、手もとには何もありません。これからやり直すのは大へんですから、あっさりと字だけにしたらいいと思います」と書き送っている（7月19日）。再度、「川平朝申装幀」の記入を促し、印刷所と掛け合うよう依頼していることからも（43年10月1日）、当初の作業が頓挫したことは明らかだ。44年12月の「史伝もどうやら出そうだそうで、これも大いに待っています」という言及（12月6日）が最後のものなので、春潮や仲宗根の言とは異なり、出版されていたとしてもこれ以降のことであったとみて間違いない。

V　台湾から先島へ

雑誌発刊に至る経緯と主要な記事についてみたところで、『南島』同人たちが展開した沖縄研究にどのような特徴があったのかまとめておこう。台湾を拠点としたことは、彼らの沖縄へのアプローチにどのように影響しているのだろうか。

『南島』が創刊された1940年までに沖縄の歴史や民俗を対象とした雑誌は少なからず発行されていた。伊波を中心に比嘉春潮や金城朝永など在京の沖縄出身研究者が活躍した『南島談話』や、真境名や島袋全発、島袋源一郎など在沖の研究者による『南島研究』などがよく知られているが、

写真４　台北放送ラジオ座談会「沖縄の文化を語る」の出席者。前列右より、金関丈夫、小葉田淳、須藤利一、南風原朝保、比嘉盛章。後列左より、松村一雄、三島格、川平朝申、川平朝甫、比嘉博。1940 年 9 月 22 日放送。（那覇市歴史博物館川平家文書 10002922）

そのなかで『南島』を特徴づけているのは八重山、あるいは宮古を含めた先島という地域を主な対象とした点であろう。当初は八重山郷土誌の計画だったのだから当然の成り行きではある。しかし、そもそもなぜ八重山研究だったのか。

ひとつの理由は台湾と八重山の近さである。物理的な距離だけではなく、社会経済的な両者の結びつきも強かった。国境線が引かれた今日の地理感覚からは想像しづらいが、八重山で販売される消費財の多くは台湾から運ばれ、与那国島などは石垣よりも基隆の便がよく、台湾銀行券の方が流通していたという。台北などの大都市は県都那覇よりも発達し、しかも距離は近く、人々は出稼ぎや修学のために旅券を持たずに自由に往来していた。

これと関連して、八重山にたいする「跛行的取り扱いの埋め合わせ」という、より積極的な理由がある。従来の研究は主に沖縄本島の研究であり、中央の学者で宮古や八重山に足を伸ばす者は少なく、沖縄本島の者ですら先島のことはよくは知らなかったという［須藤 1940-d：105-106］。しかし、実は「先島」というのは、本土から見た極めて主観的な地理認識であり、台湾に視座を置けばその一方的であることが明白だったはずだ。須藤の調査旅行は基隆を起点に、西表島祖納を経て石垣に向かう。与那国島には基隆から直行している。台湾から見た八重山は決して何かの「先にある島々」ではなかった。

このような地域性は『南島』に寄った人々に明らかな偏りをもたらしている。先に触れた「南島会員名簿」の内訳を示せば、沖縄県内 277 名、他府県 90 名、台湾 138 名、朝鮮・満州 6 名であり、沖縄県内では、宮古 16 名、八重山 72 名、沖縄本島が 189 名となっている。須藤が本土会員の少ないことに不満を述べているように、台湾と沖縄を基盤とするメディアであった。ちなみに、八重山の会員が相対的に多いのは、宮良賢貞の積極的な勧誘によるものだという（前出「書簡 8」, 1940 年 7 月 19 日）。また、編集顧問として名前があがった人々を居住地により分類すると次のようになる。

台湾在住者：浅井恵倫、移川子之蔵、小葉田淳、金関丈夫、萬造寺龍、山中樵、上原景爾、南風原朝保、豊川博雅。

沖縄在住者：喜舎場永珣、島袋源一郎、島袋全発、（川平朝令、志喜屋孝信、玉城尚季）。

東京在住者：東恩納寛惇、比嘉春潮、（伊波普猷、柳田国男）。
九州大学：江崎悌三、大島廣。

上記のうち括弧内は第2集以降に顧問に加わった人々である。須藤は、伊波や柳田のような第一人者を「直接に存じ上げていず、無暗にお願いすることも非礼と考え、敢えてお頼みしなかった」と創刊号の編集後記で述べている［須藤 1940–d：105］。台北の数学者が中心となった歴史と民俗の研究サークルは、東京を中軸として展開する専門家たちのネットワークとの重なりが小さかった。志喜屋や川平朝令は、直ぐ後で触れる川平朝申の調査旅行中に顧問を依頼されたとみて間違いない。

第2集に掲載された座談会記録で比嘉盛章は、「これからの沖縄文化の研究は東京は遠いし、京都や福岡では余り構つて呉れないから台北が中心にならなければなりませんね。一つウンとやらうぢやありませんか」と発言している［須藤ほか 1942：124］。「京都」というのは、1932年の浜田耕作を皮切りに形質人類学や考古学関連で京大関係者の沖縄調査があったことを指し、「福岡」というのは大島や江崎ら九大生物学者を指したものだろう。伊波や柳田に認められず、新天地台湾での再起に賭けた彼の意気込みが伝わる発言だ。

「沖縄の文化を語る」と題されたこのラジオ座談会は、1940年9月22日の台北放送局の番組であった。須藤が司会を務め、小葉田や金関、松村、三島、比嘉、川平といったオモロ研究会メンバと、顧問にも名のある台北県人会の南風原朝保が列席し、川平の弟の朝甫が筆記した。話題にのぼったのは、台湾や日本、東南アジア、ヨーロッパとの交渉史、表現形の比較による島民の人種分析、音韻変化に着目した日琉語の系統論、オモロの成立年代、伝統的歌舞・組踊の継承や古文書の保存に関する問題などである。

ラジオ放送には、川平が松村と木藤を伴って赴いた同年夏の沖縄調査旅行の報告会の意味合いもあったという。川平の経歴については拙稿［泉水 2013］で論じたことがあるので、ここでは要点だけ示す。川平朝申（1908–1997）は琉球国の名家に生まれたが、中学時代に家庭の事情で台湾に移住した。中学時代から絵画制作に熱中していたが、青年期からは創作文学も始め台湾の文壇で詩や児童劇などを盛んに発表する。さらに民俗学にも関心を拡げ、1935年からは移川子之蔵の教室で聴講生となった。沖縄調査を始めていた須藤とここで交友を結び、須藤訳『大琉球航海記』の装幀を引き受けることになる。材料に県産品のみを用い、琉球景観を自ら彫った版画で飾ったのは、劣等感に陥って故郷の文化を放棄しがちな在台沖縄人の趨勢に抗うためであった。琉球文化が大学教授に評価されたことで同郷人が非常に喜んだという上記のラジオ座談会も、子供番組やラジオドラマの演出を通じて放送局と関わりのあった川平が同じ目的で仕掛けたものだったとみてよいだろう。

川平とは家族ぐるみで親しく交わり、勤務先では「沖縄県人」と揶揄されるほどに沖縄出身学生を可愛がったという須藤は、在台沖縄人の心理的葛藤をよく知っていた。その結果、たとえば、沖縄という呼称よりも「琉球と云う名の方がロマンチックで伝統的な感じがある」という理由で、「琉球」を嫌う沖縄人を窘めるような発言に接すると、その無理解ぶりを厳しく批判することになる。「沖縄」が日本語固有の名称であり、いわば親元に戻った里子が「仮親につけられた名を…やめて、原の名で呼んで欲しいと云うんだから、文句を云わずにそれで呼んだらいいではないか」と須藤にしては語気が強い［須藤 1937e：74］。

彼が苛立っているのは、首里に代表される「支那文化的側面に異国情緒を感ずる」ような外来者の皮相的な関心の持ち方であった。台湾で日常的に中国文化に接している彼らにとっては、そのよ

うな側面は寧ろ「うんざりさを感じ」させるものに過ぎないという。彼にとって先島が魅力的なのは、本土でも感じられない「日本的なものを直接に感じる」からであった［須藤 1940-d：106］。であれば、先島だけではなく、「支那文化的側面」の影が薄い離島一般が関心の対象であったはずだ。先に触れた里帰りで川平は、幼少期を過ごした伊平屋島の民俗を調査しているが、それは久米島特集の次に予定していた特集企画を睨んだものであったという［川平 1966：210］。

Ⅵ　おわりに

本論でみたように、孤独な比嘉盛章の学識が須藤利一の研究者ネットワークにのって開花したのが『南島』である。比嘉が抱える中央の学界へのルサンチマンと、調査を通じた人間関係を大切にしたという須藤の人徳との幸運な出会いであったといえよう。このような個人的な背景に加え、『南島』をめぐる人々の動きからは、戦前の沖縄から台湾への近さや、植民地台湾での沖縄出身者の境遇など歴史的・社会的な背景を垣間みることもできた。

1952 年に書いた比嘉盛章への追悼文で東恩納寛惇は、「あれだけ無言の抱負を有っていながら、無言の裡に消えて行ったこの叢書（＝『南島』）は盛章君の運命の象徴でもあった」という寂しい一文でこれを結んでいる［東恩納 1952：23］。ところが、先に触れたように 69 年に下地馨が『南島』第 3 集を復刻し、76 年には、東京で八重山文化研究会を組織していた新城敏男による第 1 集の復刻がこれに続いた。翌 77 年には、在沖台湾人の陳哲雄が、台湾の知人から譲られた第 2 集を原本に全 3 集の復刻を完成させている。復帰前後から再燃した沖縄の郷土研究熱と、戦後も途切れなかった台琉関係は、『南島』が「無言の裡」に留まることを許さなかったのである。

注

1）この時期の同誌には欠番が多く、269 号に掲載の連載第 6 回の他は確認ができないが、連載は 264 号（1938 年 8 月）から 272 号（1939 年 4 月）にわたる全 9 回であったと推測する。274 号には追記が掲載され、276 号には当時の須藤が翻訳にまつわる問題を強く意識していたことがわかるエッセイが掲載されている。

2）1965 年の翻訳と内容が重なる箇所は『月刊文化沖縄』の第 2 巻第 9 号の後半部以降の琉球史の記述である。

3）不明点の多かった比嘉盛章について、新城栄徳、粟国恭子の両氏から極めて有益な教示を受けた。とくに粟国氏は自ら収集していた資料を快く提供して下さった。記して感謝申し上げる。

4）「『おもろ』の父伊波君の研究態度を讃仰して『おもろ』新人諸君に一言す」11 月 22 日（沖縄県立図書館蔵『東恩納寛惇新聞切抜帖』第 6 冊）。

参照文献

江崎悌三
1933 「“Samarang” の東洋探検」『植物及動物』第 1 巻 第 3 号、98 ～ 103 頁。
1934 「八重山遊記（1）」『ドルメン』第 3 巻 第 11 号、51 ～ 60 頁。
1935-a 「八重山遊記（3）」『ドルメン』第 4 巻 第 3 号、51 ～ 59 頁。
1935-b 「八重山遊記（4）」『ドルメン』第 4 巻 第 4 号、55 ～ 61 頁。
1935-c 「八重山遊記（2）」『ドルメン』第 4 巻 第 2 号、62 ～ 69 頁。
大島廣
1933-a 「八重山・宮古諸島採集旅行記」『植物及動物』第 1 巻 第 4 号、69 ～ 79 頁。
1933-b 「八重山・宮古諸島採集旅行記（II）」『植物及動物』第 1 巻 第 5 号、71 ～ 80 頁。
1933-c 「八重山・宮古諸島採集旅行記（III）」『植物及動物』第 1 巻 第 6 号、85 ～ 92 頁。

1933-d 「八重山・宮古諸島採集旅行記（IV）」『植物及動物』第 1 巻 第 7 号、1007 ～ 1010 頁。
1947 「岩崎卓爾翁と正木任君」、柳田国男（編）『沖縄文化叢説』、中央公論社、73 ～ 80 頁。
沖の島人
1913「文部検定に合格せる比嘉盛昇君」『沖縄教育』第 82 号、63 ～ 66 頁。
川平朝申
1966 『山河あり―琉球歴史の周辺より―』琉球文教図書。
1977 「『南島』第 2 集の復刻に寄せて」、『南島　第 2 集（限定復刻）』、野嵩書院。
小底貫一
2002 『イリオモテ山猫の呟き―山島男の半生あぶり出し―』文芸社。
古波蔵保好
1989 「わたしの戦後史」、沖縄タイムス社（編）『わたしの戦後史』（第 9 集）、沖縄タイムス、193 ～ 223 頁。
島袋全幸
1976 「新おもろ学派のこと」『沖縄文学』第 13 巻 第 1 号（通巻 46 号）、1 ～ 9 頁。
島袋全発
1933 「おもろさうしの読み方―展読法の研究―」『沖縄教育』第 198 号、43 ～ 53 頁。
首里市役所
1931 『首里市市制施行十周年記念誌』首里市役所。
新城安善
1977 「須藤利一書誌―南島文化に腐心した素顔―」『新沖縄文学』第 37 号、135 ～ 145 頁。
須藤利一
1934 「古来日本人の数学思想」『台湾教育』第 390 号、14 ～ 32 頁。
1935-a 「八重山雑記―（黒島・新城紀行）―」『旅と伝説』第 8 年 11 月号（通巻 95 号）、2 ～ 18 頁（『南島覚書』東都書籍、1944 年 2 月に再録）。
1935-b 「琉球の Knot Records」『日本学術協会報告』第 10 巻第 1 号、227 ～ 232 頁。
1935-c 「琉球数学雑考」『沖縄教育』第 231 号（11 月）、1 ～ 17 頁。
1935-d 「わらざん（琉球の結縄）」『南方土俗』第 3 巻 第 3 号、1 ～ 35 頁。
1936-a 『算用拔』古典数学書院。
1936-b 「八重山数学『算用秡』に就て」『南方土俗』第 4 巻 第 2 号、43 ～ 57 頁。
1936-c 「与那国島管見」『台湾時報』10 月号、55 ～ 62 頁。
1936-d 「与那国島紀行（岩崎卓爾先生に捧ぐ）」『旅と伝説』第 9 年 10 月号（通巻 106 号）、9 ～ 25 頁（『南島覚書』東都書籍、1944 年に再録）。
1936-e 「わらざん（沖縄の結縄第 2 報）―主に八重山現行祈願用算に就て―」『南方土俗』第 4 巻　第 2 号、1 ～ 14 頁。
1937-a 「宮古算法に就いて（下）」『沖縄教育』第 250 号、1 ～ 9 頁。
1937-b 「宮古算法に就いて（上）」『沖縄教育』第 247 号、1 ～ 6 頁。
1937-c 「宮古算法に就いて（中）」『沖縄教育』第 249 号、1 ～ 8 頁。
1937-d 「与那国島の『バラザン』『カイダー字』及び『家判』」『民族学研究』第 3 巻 1。
1937-e 「沖縄雑記」『台湾時報』2・3 月。
1937-f 「旅の話（塩見学兄へ）」『台高』第 6 号、17 ～ 20 頁。
1938 『八重山算法』沢村寛。
1939-a 「沖縄の『イシガントー』」『ドルメン』第 5 巻 2 号。
1939-b 「八重山の郷土玩具」『民族学研究』第 6 巻 1 号。
1940-a 「アダムスの那覇見聞録」『南島』第 1 集。
1940-b 「すうちうま（琉球数碼）」、『安藤教授還暦記念論文集』、三省堂。
1940-c 「八重山の穂利祭―日記風に―」『南方民族』第 6 巻 1・2 合併号、82 ～ 106 頁。
1940-d 「編輯雑記」『南島』第 1 集、104 ～ 107 頁。
1940-e 「異国船琉球漂到記」『愛書』13（4 月）。
1940-f 「編輯雑記」『南島』第 1 集、104 ～ 107 頁。
1940-g 「訳者緒言」、バジル・ホール『大琉球島探検航海記』、野田書房、1 ～ 34 頁。
1941 「琉球記（1）～（8）」『月刊文化沖縄』第 2 巻 第 5 号～第 3 巻第 1 号。
1944 『南島覚書』東都書籍。
1955 「比嘉盛章氏のことども」『琉球新報』9 月 15 日（沖縄県立図書館所蔵天野鉄夫新聞切抜帖『琉球学集説』9）。

1965 「ビーチの『琉球の歴史』―那覇停泊中の見聞録」『琉球新報』11 月 12 日～ 18 日。
1966 「沖縄と私」『南島研究』第 5 号、17 ～ 26 頁。
1969 「『南島第 3 集』復刊に寄せて」、下地馨（復刻発行）『南島　第 3 集』、宮古民族文化研究所、無頁。
1974 『異国船来琉記』法政大学出版局（須藤利一先生古稀記念出版実行委員会編集）。
須藤利一ほか
1942 「沖縄の文化を語る（座談会）」『南島』第 2 集、118 ～ 125 頁。
泉水英計
2013 「親日であれ親米であれ我が郷土―植民地台湾で育った米軍政下の沖縄人文化行政官」、永野善子（編）『植民地近代性の国際比較』、御茶の水書房、19 ～ 45 頁。
陳哲雄
1977 「『南島』第 2 集の復刻について」、『南島　第 2 集（限定復刻）』、野嵩書院。
仲宗根将二
2008 「慶世村恒任と『宮古史伝』」、慶世村恒任『新版　宮古史伝』、冨山房インターナショナル、369 ～ 383 頁。
中村忠行
1944 「編輯後記」、『南島』（第 3 輯）、南島発行所。
楢原知満
1916 『沖縄県人事録』沖縄県人事録編纂所。
東恩納寛惇
1952 「比嘉盛章君を憶ふ」『おきなわ』第 23 号、22 ～ 24 頁。
比嘉春潮
1955 「序」、慶世村恒任『宮古史伝』、伊志嶺賢二、1 ～ 2 頁。
1965 「沖縄文学研究の歴史」『文学』第 33 巻 7 月号、40 ～ 49 頁。
1969 『沖縄の歳月―自伝的回想から―』中央公論社。
1971 『比嘉春潮全集』（第 4 巻）沖縄タイムス社。
比嘉盛章
1925 「『沖縄の人形芝居』を読みて（1）～（12）」『沖縄朝日新聞』4 月 1 日～ 17 日、19 日、21 日～ 26 日（『宮良當壮全集月報』2 ～ 12、1981 ～ 83 年に再録）。
1933 「古琉球の国都は首里か浦添か？」『琉球新報』2 月 23 日～ 3 月 14 日（沖縄県立図書館所蔵天野鉄夫新聞切抜帖『琉球学集説』2・3）。
1937-a 「琉球語による古代国語の新解釈」『台大文学』第 2 巻 第 1 号、67 ～ 89 頁。
1937-b 「琉球語による古代国語の新解釈」『台大文学』第 2 巻 第 5 号、42 ～ 64 頁。
1937-c 「琉球土俗より見たる高天原民族の北上説」『南方土俗』第 4 巻 第 3 号、32 ～ 48 頁。
1938 「琉球の音楽舞踊に就いて（上）」『南方土俗』第 5 巻 1・2 合併号、9 ～ 43 頁。
1939 「琉球の音楽舞踊に就いて（下）」『南方土俗』第 5 巻 3・4 合併号、18 ～ 45 頁。
1940 「西表の節祭とアンガマ踊」『南島』第 1 集、1 ～ 32 頁。
1942 「琉球古典舞踊について」『南方民族』第 6 巻 第 4 号、1 ～ 39 頁。
松村一雄
1942 「おもろさうし研究（第 1 回）まへがき」『南島』第 1 集、132 頁。
三木健
1989 『八重山研究の人々』ニライ社。
宮良当壮
1925 『沖縄の人形芝居』郷土研究社。
八重山郡教育部会
1931 「慶来慶田城由来記」『沖縄教育』187 号。
屋嘉比収
2010 『〈近代沖縄〉の知識人―島袋全発の軌跡』吉川弘文館。
矢袋喜一
1934［1915］『琉球古来の数学と結縄及記標文字』青年教育普及会（復刻版　沖縄書籍販売社、1982 年）。

※ウェブ公開にあたり、著作権保護のため一部写真資料を掲載しておりません。刊行物でご確認ください。